

## 仮設住宅に暮らす子どもたちのエンパワメントを目指した支援プログラム評価

— 3年間にわたる仮設住宅訪問を通して —

○ 東北福祉大学 阿部 利江 (7795)

コミュニティエンパワメント、支援プログラム、仮設住宅訪問

### 1. 研究目的

東日本大震災以来、これまでに形成されてきた地域や家庭などの生活機能は不全となり、子どもたちを取り巻く環境は著しく変化した。そして、生活スタイルが多様化するなかで人と人との結び付きは疎遠になり、コミュニティづくりを推進する課題は尽きない。

2012年3月、ある地区の主任児童委員より、担当地域の仮設住宅での子どもたちの生活を支援することに協力が求められた。そして、主任児童委員からは、復旧期（被災による生活の非日常から日常へ復帰する段階）における仮設住宅の課題として、①仮設住宅内のコミュニティが希薄であること、②子どもたちの居場所が失われていること、③保護者の精神的ストレスが子どもに影響を及ぼし、ときには虐待につながる恐れがあることが提示された。

そこで、主任児童委員とともに、子どもたちのエンパワメントを目指した支援プログラムの設計と仮設住宅への訪問活動に取り組んだ。本研究の目的は、その支援プログラムの評価をおこなうことにある。

### 2. 研究の視点および方法

#### 1) 研究の視点

この訪問活動は、長期化する仮設住宅での生活を予測し、継続的に子どもたちの生活環境の変化を把握することとし、地域の復興（自立）段階に応じた支援プログラムの開発が必要であるとの下に設計した。また、支援する側が企画し、イベントなどを開催する単発的な活動とは異なり、ソーシャルワークの援助過程から、子どもたちをエンパワメントしていく継続的な活動である。

#### 2) 研究の方法

##### ①手続き

2012年8月から2015年3月までに定期的な仮設住宅訪問を実施した（事前訪問を含め33回）。この訪問活動にはソーシャルワークを学ぶ学生も参加し、支援プログラムの展開を観察し続けてきた。活動内容は、仮設集会所にて自治会行事とする「ひろば」を開催し、多世代での交流を意識する遊びや物づくりをおこなった。その際、報告者は、子どもたちの様子を観察するとともに、「ひろば」に参加した自治会役員や社会福祉協議会職員との定期的な情報の交換・共有をおこなった。

## ②支援プログラム設計

コミュニティエンパワメント技術モデルに基づく目標・戦略設計の枠組みを参考に、仮設住宅に暮らす子どもたちのエンパワメント支援設計をおこなった。エンパワメント支援設計を図1に示す。

## 3. 倫理的配慮

訪問活動を通して得た被災者の情報は、この支援プログラムに携わる関係者のみで共有し、外部に漏れることや個人が特定されることのないように十分な注意をおこなうこととした。

## 4. 研究結果

これまでの訪問活動を通して、そのプロセスをモニタリングするとともに、エンパワメント支援設計において設定したアウトプット（成果）を評価する。

### 1) 住民の主体的なコミュニティづくり

異なる地域生活・文化を営んできた住民の集まりであることから、新たな人間関係を築くことは困難にあった。しかし、自治会役員が中心となる団地内行事を企画し、ボランティアの協力を得ながら運営することで、仮設住宅での生活課題を話し合う機会も生まれた。

### 2) ネットワークやボランティアの活用

「ひろば」に参加した住民や自治会役員、社会福祉協議会職員との定期的な情報の交換・共有から、一定のネットワークの形成がみられ、支援の輪を広げることにつながった。また、ボランティアの活動についても議論する場ができた。

### 3) 子どもたちの発達をささえる環境

この活動に携わる関係者のネットワークが形成されたことにより、子どもたちを支援する環境の調整などは進められた。しかし、専門的な支援を必要とする子どもの生活課題を解決するには至らず、その一端を担うことも容易でなかった。

## 5. 考察

訪問活動を通して、仮設住宅に暮らす住民は支援を受けることに依存傾向が強く、ボランティアによる支援が自立を妨げるのではないかと懸念することもあった。しかし、仮設住宅での生活は社会的な格差を生み出し、支援環境のなかでしか活動できない子どももいることが事実にある。そのため、被災した地域の子どもたちがエンパワメントを発揮する日常生活を取り戻せたとはいえない。この支援プログラムは、活動に参加した住民や関係者らが、子どもたちの地域生活を見守る支援意識を高められたことに評価できる。

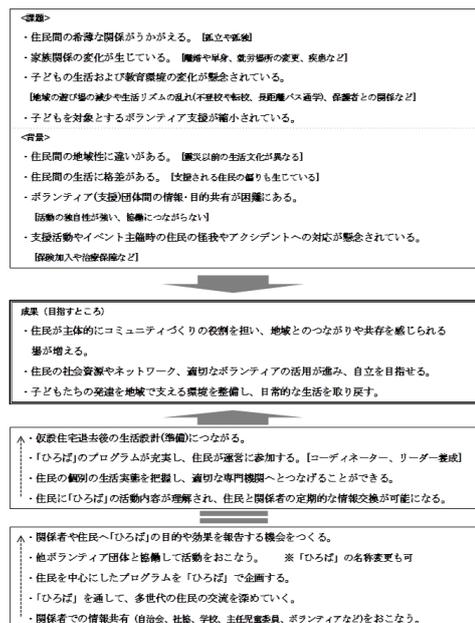


図1 エンパワメント支援設計